



韓国の恨と日本の諦

朝鮮民族の精神構造の底流にある情緒、情念が「恨」(ハン)といわれるものです。韓国出身の評論家・呉善花氏は著書の中で「恨」についてこんな説明をしています。

《恨は単なるうらみではなく、達成したいこと、達成すべきことができな自分の内部に生まれる、ある種の『くやしき』に発している。それが具体的な対象を持たないときには自分に対する嘆きとして表され、具体的な対象を持つとそれがうらみとして表されるのだといってよいように思う。さらに重要なことは、そうした恨を溶いていくことが美德とされ、美意識ともなるということである。》(『続・スカートの風』三交社)

筑波大学教授の古田博司氏は、「恨」の精神文化的源泉を朝鮮独特の階級社会に求め、《伝統規範からみて責任を他者に押し付けられない状況のもとで、階層型秩序で下位に置かれた不満の累積とその解消願望》(『朝鮮民族を読み解く』筑摩書房)と解説しています。

李朝時代の伝統的階級は上から王族、両班、中民、常民、奴婢で、この他、階級制度の外に置かれる白丁(被差別民)がいました。日本の士農工商が、階級というより職業区分の傾向が

強かったのに比べ、朝鮮の階級制度はどちらかといえばインドにおけるカーストに近いものがあるようにも思えます。

驚くべきは朝鮮における賤業せんぎょうのカテゴリーの広さです。妓生きせいや遊芸者はむろんのこと、医師や女官、調理人や僧侶までもが賤業とされていたのです。韓国における階級制度は近代化以降、建前上はなくなりましたが、さまざまな差別が露骨な形で存在しており、今でも製造業や飲食業は地位の低い者の職業とされ蔑視の対象にあります。

また地域差別——とりわけ全羅南道や済州島出身者に対するそれや障害者に対する偏見など韓国社会における差別の根はとても深いのです。差別の種が多ければ多いほど、生じる「恨」も多種多様ということになります。歴史上、周辺大国のさまざまな干渉を受け続けていたことも「恨」文化の醸造に大きな影響を及ぼしていることは確かでしょう。とりわけ、文化的に弟(格下)と見なしていた日本に支配された屈辱は彼らの中に深い「恨」のリゾームを張り巡らせることになったと想像できます。

海に囲まれた日本は幸いなことに、戦後7年間アメリカの占領下にあったことを除けば、他国に征服されるという経験はありませんでした。しかし、神様はよくしたもので(？)、まるで帳尻を合わせるかのように、日本列島を地震や火山噴火、津波、台風といった自然災害の宝庫にこしらえたのです。また、ご承知のように、徳川時代、江戸の町だけでも何度も大火に見舞われています。木と紙でできた家がひしめく世界一を誇る人口密度の八百八町、火災が起き

ればひとたまりもありません。家族を失い文無し家無しとなって焼け出された人々の悲嘆はいかようか。それこそ、天に向かつて恨みの言葉を吐きたくもなるでしょうが、不思議なことに、日本人には「恨」に類似する精神文化は育ちませんでした。その代わりに、培われたのは「諦念」、つまり諦めの心です。「失ったものはいくら嘆いても返ってほこない。そう思つて諦めよう」。涙を拭いて、一から出直そう、無くしたものは一生懸命働いてまた築けばいいではないか、というのが日本人に染み付いた「諦」の考え方です。

先の大戦で日本の主要都市のほとんどは灰燼に帰してしまいました。その焦土からわずか19年でアジア初のオリンピックを主催するという奇跡の復興を成し遂げたバイタリテイの根源は実はこの「諦」の精神にあったのかもしれない。

## 日本と韓国、それぞれの「徳」

日本人の諦念は仏教の無常観と密接な関係にあります。呉善花氏が、韓国人の「恨」に對比させる、日本人の心情として「もののははれ」を挙げているのは、卓見であると言わざるをえません。「もののははれ」は無常観そのものだからです。

日本人でもよく混同してしまうのですが、「無情」と「無常」は似て非なる言葉であり、無常はその字の通り、「常では無い」、世の中に変化しないものなど存在しない、という意味の言葉です。「形あるものいつかは滅す」「朝の紅顔、夕べの白骨」という言葉にも象徴されています。

一方、「恨」は、儒教的な色彩の濃い概念です。儒教は人間を君子と小人に分け、君子の生き方を示す一種の人間学、人間宗教であつて、信仰対象は祖先であり、基本的に人間以外の至高の存在を置きません。

日本人にとって天災はあくまで「天のなせる災い」であり、いくら人間が抗つても天地自然には勝てないという「諦」があります。これは仏教的無常観と日本人特有の自然崇拜が合わさつた考え方なのです。

朝鮮が歴史的に受けて来た辛苦の多くは、侵略や悪政といった人為的な要因によるものといえます。つまり広い意味での人災です。さらに言えば、儒教では天災もまた人災なのです。旱魃や疫病などの天変地異が続くと、民衆は、為政者の徳がつかえなからだと考え、天がこの為政者を見放した証拠と考えます。そして、王、あるいは王朝そのものの交代が起こるとされるのです（易姓革命）。天災といえども、自然界にその原因を帰するのではなく、誰かに責任を被せるのが朝鮮儒教式の考え方といえます。

そして、徳を失い王座から去つた者への容赦ない仕打ちこそは、易姓革命の最大の特徴ともいえるのです。韓国の歴代大統領の退陣後の末路がまさしくそれを物語っているでしょう。初

代大統領の李承晩イソンマンは追われるようにしてハワイに亡命、死ぬまで祖国の土を踏むことはありませんでした。全斗煥チョンドフワン（第11・12代）は1980年の光州暴動に対する武力鎮圧が問題となり死刑判決（のちに減刑）を受け、盧泰愚ノテウ（第13代）金泳三キムヨンサム（第14代）、金大中キムデジン（第15代）もそれぞれ任期中の収賄や不正蓄財がもとで投獄を経験し、さらに盧武鉉ムヒョク（第16代）の謎めいた自殺。朴槿恵パククネ大統領の父君・朴正熙パクチョンヒ（第5〜9代）にいたっては任期中に暗殺の憂き目にあっていきます。

ついでに言いますが、日本人の考える「徳」と韓国人の考える「徳」では根本の意味が大きく違います。ざっくり言えば、「徳の高い人は嘘をつかない」と思うのが日本人であり、「徳の高い人だから嘘をついてもかまわない」と考えるのが韓国人なのです。彼らのいう「徳」とは天から預かった権利・権力のような概念と思ってください。したがって、「徳」も貯金と同様、使い切ってしまったえば無くなるのです。むしろ、徳を積む、よい行いをして「徳」の預金残高を高くするという手もありますが、人間、とりわけ権力者の思考と行動は、なかなかそちらの方には向かわないもののようなのです。一度「徳」を使い切ったと判断された為政者は権力財産のすべてを失うどころか、一気に人民の「恨」の対象となるのです。まさに一寸先は闇、オール・オア・ナッシング、が韓国の為政者ということになります。いきおい、権力（徳）のあるうち奪えるものは奪う、貪れるものは貪るといふ発想になります。権力者の親族や側近が私服を肥やすのはそのためです。

### セウォル号沈没事故で問われた大統領の「徳」

修学旅行生300人余の人命が失われた貨客船セウォル号の沈没事故、あれこそまさしく人災が人災を呼んだというべき複合的人災による前代未聞の大惨事でした。当初こそ、船長や運営会社に対して向けられていたマスコミの責任追及の矛先が、事故後の不手際もあり、ある時期を境に一転、朴大統領へと向かったのを記憶している読者も多いことでしょう。マスコミと大衆は朴大統領の些細な失言を突き、犠牲者遺族は、追悼所に贈られた彼女名義の花輪を打ち捨てるといふこれ以上ない非礼で報いました。まさしく国を挙げて、朴大統領の「徳」を問いだしたのです。大統領にしてみれば、「徳を喪失した」という風評が国中に蔓延することが何よりの恐怖だったに違いありません。

現在、韓国では朝鮮戦争時代に始まったアメリカ軍向け慰安婦（洋公主ヤンゴンジュ）の問題が浮上し、元慰安婦たち122人が韓国政府相手に謝罪と賠償を求めて訴訟の動きがあります。朴大統領が無事任期満了で大統領職を終えたとしても、野に下ったとたんに、今はまだ火種に過ぎないこの問題が、枯れ草に放たれた炎となつて彼女に襲ってくる可能性も否定できません。なぜなら、米軍向け慰安所の設置を許可したのは他ならぬ朴大統領の父君・朴正熙大統領だったからです。この次第によれば、朴槿恵大統領の逮捕（罪状は何でもかまいません）、そして父の代からの財産没収などという事態も充分考えられるのです。

現に全斗煥氏は、30年も前の大統領時代の不正蓄財に関する未納追徴金を巡って徹底的な押収捜査を受けています。その際、檢察は金属探知機まで動員し全氏の家はもちろん長男の会社とさえ言われています。さらに、全氏が死後、歴代大統領が眠る国立墓地への埋葬を拒否する法案が議会に発議されました。その後、この法案が可決されたという報は入ってきていませんが、何よりも祖先の墳墓を大事にする儒教国家において、これほど屈辱的な仕打ちはないといえましょう。

全氏に対するこの徹底的な見せしめ捜査は、朴槿惠大統領の意向が強くと働いていると言われています。全氏が大統領就任後、大恩あるはずの朴正熙元大統領の娘で、夫人の死後は母に代わって事実上のファースト・レディ役だった槿惠氏を冷遇したことへの意趣返しとも噂されており、まさしく「私怨」であり「恨」なのです。

槿惠氏が私怨の人であるのは、セウォル号事件の当日の彼女の動向を巡ってゴシップ調の記事に仕立てたということで、産経新聞社元支局長の加藤達也氏を名誉毀損で在宅起訴するという愚挙からも伺えます。

当然、朴槿惠大統領が元首の座を去ったあと、青瓦台周辺から彼女に対する「恨」が一気に噴出する可能性は充分ありますし、その兆候として現れたのが洋公主問題なのです。

## 愛する「恨」

金素月キムソウオルという併合時代を生きた朝鮮の詩人がいます。彼のもっとも有名な詩が「チンダルレ」で、現在の韓国でもこれを諳まよんじる人も多いそうです。チンダルレとは「つつじの花」の意味。1922年といえますから、三一独立運動のわずか3年後の作です。

### 「チンダルレ」(つつじ)

わたしが嫌いで 行くのなら なにもいわずと見送りましょう

寧辺の薬山の つつじをば ひと抱え 行く手の道に撒きましょう

ひと足ごとに その花を そつと踏みしめ お行きなさい

わたしが嫌で 行くのなら 死んでも涙はみせませぬ (金思燁キムサヨウ訳)

哀切極まりない男女の別れの歌です。しかし、呉善花氏によれば、韓国人がこの詩を読めば、詩に込められた壮絶な「恨」を感じずにはいられないのだそうです。

《時代的な背景からして、この詩は、失われた祖国への恨を歌ったものと言われている。「去り行く恋人」に仮託して「去り行く祖国」への悲しみが、恨として歌われているのだ。詩のテーマは、国民を見放して日本の統治下へと去り行く祖国、なのである。》《この詩は、けっして

「やさしさ」の心情を表したのではない。自分から去って行く恋人を「黙って優しく送る」ことなど、とても常識でできることではなく、すさまじい恨なくしてはできないことである。《(呉善花著『ワサビと唐辛子』祥伝社)

ラブソングに姿を借りた祖国喪失の「恨」を歌ったものなのだといふのです。なるほど、そう思いながら改めてこの詩を鑑賞すると、また違った味わいがあります。その上で、興味深いのは、この詩の「恨」が、去り行く祖国に向けられており、祖国を併合した日本に向けられたものではないといふことでした。併合にいたらざるを得なかった(無力な)祖国、あるいは時世や運命に対して怨嗟(えんさ)の声を挙げていたのではないかといふ私の仮説の一助となりました。そして、しる戦後、扇動されて肥大したのではないかといふ私の仮説の一助となりました。そして、よくよく考えてみれば、これも「寝取られ」の歌です。

チヨ・ヨンピルが「NHK紅白歌合戦」で歌った、その名も「恨五百年」といふ歌があります。もともとは、高麗を滅ぼし、李朝を建てた李成桂(イソンゲ)に対する高麗殘党の「恨」を歌ったもので、メロディは伝統的な江原道民謡からの借用だそうです。この曲もまた、男女の別れ(こちらは死別)に仮託した祖国への「恨」が歌われています。

### 「恨五百年」

恨多きこの世 薄情な人よ 情を残して体だけ逝ってしまった

ああ 恨み五百年生きようというのにどうしてもやりきれない

白砂の砂畑に七星壇を祀り あなたを生き返らせてと祈る

ああ 恨み五百年生きようというのにどうしてもやりきれない

私が子供のころ、ある芸能人夫婦が離婚し、当時としては破格の2億円の慰謝料が大いに話題になったことがあります。果たして、この夫(俳優)は、2億円ぶん愛されていたといふことなのか、あるいは、2億円ぶん嫌われていたといふことなのか、そんなジョークのネタにも使われていました。さしずめこの歌をそれ式に解釈するなら、五百年愛すると誓った恋人が先に逝ってしまったら、その「恨」を溶くには五百年かかるといふことでしょうか。「恨」とはこのように愛が窯変(まがひん)したものであるようです。愛してもつくしても報われない、そのとき彼(彼女)の愛は「恨」となって燃え上がるのです。

### 「のたうち回る」愛

その上で私なりに「恨」といふものを解釈するならば、ずばり、それは「のたうち回る心」です。

知り合いの編集者で、過去、複数の韓国人のホステスさんと個人的に交際を経験した人がいて、その彼に何度となく、韓国人女性の愛情表現の大胆さ、情の濃さについて聞かされてきました。たとえば、食事のとき彼は一切箸を持つ必要がないのだそうです。アーンと口を開ければ、女性の方が食べ物を箸で食べさせてくれるのだとか。これは彼がつきあつた韓国女性に共通した行動だそうです。おそらく妓生式の食事作法がそのまま持ち込まれたものでしょう。ある意味では男性天国といえます。

かと思えば、やはり韓国の女性に共通する傾向として、嫉妬の方もかなり苛烈だったようです。雑誌編集という仕事柄、入校間近になると会社に着き泊まり込みが続いたりしますが、一時間おきに、女性からの電話があつて居場所の確認を迫られたと言っていました。明け方、女性から呼び出しがあり、徹夜明けの朦朧とした頭を抱え待ち合わせの深夜喫茶に行ってみると、髪を残バラにした化粧つきの顔に、泣き腫らした目を二つ並べた彼女が待っていて、ひときり恨みごとを言われたと、その編集者は苦笑していました。

要は「私はあなたのためにこれほど泣きました」「あなたのためにこんなのにたうち回ったのよ」ということを、この韓国人女性は、半ば意識的に恋人に示しているのです。これが韓国流の愛の表現なのです。韓国人は喜びも悲しみも怒りも、むしろ愛情も、あらゆる感情は可視化、言語化させることで初めて相手（周囲）に伝わると考えます。葬儀の席で「のたうち回る」ように嘆き悲しんで見せるのはそのためです。

「お父さん、お父さん、なぜ私たちを置いて逝ってしまったの。あなたのカバンに私を詰めて、一緒に天国に連れて行ってください……哀号！」——。これは知人が韓国である葬儀に出席したとき、実際に目に耳にした、棺に取りすがる遺族の言葉です。本当に悲しいとき、人はそこまで饒舌になれるだろうか、と正直、知人は思ったようですが、決して演技とも言い切れないわけで、ここいらへんは、感情の表し方のシステムが違うのに過ぎません。ある意味でいえば、とても情熱的です。日本人のように、抑えた感情からぼろりとこぼれる涙や優しさに、美的なものを見出すという精神文化とは対極にあります。

韓流ブームのとき、「韓国人男性はとても情熱的」といった喧伝がさかんなされていましたが、わかりやすく言えば、「韓国人男性はあなたのために、のたうち回って、くれますよ」と言っているのに過ぎないのです。「のたうち回る」ことに不得手な日本人男性に比べれば、女性の前で堂々と「のたうち回る」ことのできる韓国人男性は、一見、情熱的でストレートな性格に映るのも理解できなくもありません。おもちゃ売り場で手足をバタバタさせ泣きながらおもちゃをねだる子供の姿を想像してみてください。あれも子供なりの情熱なのです。

いわゆる元慰安婦のおばあさんたちが日本を非難するとき、まさしく「のたうち回」っていますが、あれのビジュアル効果というものは絶大です。「のたうち回る」文化を持たない日本人はそれだけで圧倒され、おばあさんたちがあそこまで泣いているのだから、日本軍はとても酷いことをしたのに違いない、多くの日本人はそう思い込まされてきたのです。近年では、さ

らなる反日宣伝効果を狙って、アメリカやヨーロッパといった第三国で「のたうち回る」パフォーマンスに余念がないようですが、あれを止めさせる手だては今のところ私たちにないのが現状であり、憂慮されます。

こういった「のたうち回り」のパフォーマンスに関しては第3章をご参照ください。縁ではないでしょう。韓国の巫女文化については第3章をご参照ください。

「単なる恨みの感情ではなく」——、「恨」を語るときの典型的な枕詞ですが、のたうつほどの「恨み」とはどのような感情かと考えると、どうしても、赤の他人に向けられるものでなく、恋人や肉親といった身内が対象のような気がしてなりません。愛憎です。

### カイン・コンプレックスと「鏡よ鏡」症候群

私は、韓国の反日が決して解消することがないのは、それが単なる反・日ではなく恨・日だからだと思っております。日本に対する恨の感情——それは、韓国が日本を身内として意識している証拠ともいえます。韓国にとって日本は、時に不埒な弟であり、時に不貞な妻であり、時に妻（竹島）を狙っている隣家の男なのです。常に手の届く身内の存在でなくてはなりません。

韓国人独特の世界観に小中華思想があります。それによれば、中国を文化的父とし、自分

（韓国）を兄、日本を弟に見立てます。日本の文化はすべて兄である韓国（朝鮮）から伝わったというのが、彼らの民族的自尊心の根本となる神話です。したがって、その「弟」たる日本に36年支配を受けるといふ事実は彼らにとってこの上もない恥辱であったということとは、とりあえず論理的には理解できません。光復（解放）後は光復後で、日本は自分たちの常にはるか前を歩いている。国際的信用度もまるで違う。韓国にしてみればこの弟は実に癩の種なのです。

韓国のこの心理状態を、旧約聖書創世記、アベルとカインの物語から取って「カイン・コンプレックス」と呼ぶことにします。カイン（兄）とアベル（弟）は、楽園を追われたアダムとイヴがもうけた二人の子です。雄々しく成長したカインとアベルですが、ある日、二人は神に貢物みつぎものをすることになりました。しかし、神はアベルの貢物には目を留めたのですが、カインの貢物には一瞥いちべつもくれようとしませんでした。嫉妬にかられたカインはその後、アベルを野原に連れ出し、これを撲殺してしまおうのです。聖書ではこれを人類最初の殺人としています。

韓国が国策として、世界規模レベルで行っているジャパン・デイスカウント運動（日本の国際的評価を下げる運動）とはまさしく、韓国という名のカインの弟殺しに他ならないのです。日本を「下げ」なくては自分たちの国際社会性の評価が「上がる」こともありえないと考えるところが、とどのつまり彼らの世界観の限界を物語っています。それはとにかく、彼らが日本を身内と見ていることを意味しています。

韓国のマスコミに「日本イルザン」という語が登場しない日はありません。「日本」で明け「日本」

で暮れるのが韓国マスコミの特徴です。かつて、アメリカがくしゃみすれば日本が風邪を引くと言われたほど、アメリカと一蓮托生の関係にあったとされる日本でさえ、TVのニュースや報道番組で朝から晩まで「アメリカ」が登場するわけではありません。言い換えれば、韓国は日本が気になって気になって仕方がないのです。

その姿は白雪姫の継母にも喩えられます。

「鏡よ鏡、東アジアで一番の先進国はどこ？」

「鏡よ鏡、東アジアで一番の技術大国はどこ？」

「鏡よ鏡、東アジアでもっとも国際社会に貢献している国はどこ？」

「鏡よ鏡、東アジアでもっとも多くノーベル受賞者を輩出している国はどこ？」

鏡よ鏡……常に鏡に向かってそう一人ごちているのが韓国です。これに対して鏡の答えは非情ともいえるものです。

「それは日本でございます」。

おとぎ話の方では、白雪姫さえいなければ、私こそが世界一の美女だとばかりに、継母は魔女の本性を露あらわにして白雪姫殺害に動きます。世界中に告げ口という毒りんごを売り歩く魔女の姿が目につかぶようです。

このように、常に日本を意識して、日本を基準にして、日本と比べて、一喜一憂する韓国人の精神病理を「鏡よ鏡」症候群と名づけました。

### 不良債権化した「恨」

韓国の恨日がたとえば、パレスチナの反イスラエル、パキスタンの反インドの感情とまったく質を異にしている点がおわかりになっていただけたかと思えます。韓国は日本を身内だと思っているのです。身内だから生まれる怨嗟＝恨なのです。

結局のところ、今後日韓関係にどのようなことが起ころうと韓国の方から日本をつき放すことはありえないと思えます。経済、安保の問題を抜きにしても、です。あるいは朴政権がいかに中国と接近しようとも、日本と完全な「他人」にはなろうとはしないはず、とこれは断言します。

韓国にとって、日本のように自分たちの声を聞いてくれる国は他に地球上に存在しません。日本は好きなき、好きなき「恨」をぶつけられる実に都合のいい相手なのです。

呉善花氏は「恨」を「達成したいこと、達成すべきことができないう自分の内部に生まれる、ある種の『くやしき』に発している」と説明しています。その意味でいえば、日本は韓国にとって永遠の「恨」の対象です。なぜなら、決して「達成できない」位置に未来永劫、日本があるからです。この差は50年、100年では到底縮むことはないでしょう。

1910年（明治43年）、大日本帝国が大韓帝国を正式に併合、以後36年間、日本の朝鮮総督府が朝鮮を支配しました。これはまぎれもない事実です。ある民族が他民族によって支配さ

れる、その無念は理解できるつもりですし、その点でいえば、「恨」もごもつともです。しかし、身に覚えのない「恨」まではお引き受けするわけにはいきません。

韓国の教科書には、総督府の行った土地調査を「日本人が小高い丘に登ってあたりを見回し、そこからそこと土地を指さして手当たり次第良田を奪った」行為と記されています。まったくのデタラメで、総督府による土地調査により新たに公有地に指定されたのは全耕作可能地の3%に過ぎません。むしろ、農民170万人の土地所有が認められ、土地台帳も整い、朝鮮史上、これほど多くの自作農が誕生したことはむしろ大いに特筆されるべきだと思います。

では、「土地を指さして手当たり次第良田を奪われた」良民の「恨」までもがデタラメの作り話かといえ、これも嘘になります。1874年、フランス人宣教師のシャルル・ダレの著書『朝鮮事情』に、李朝末期のこれによく似た土地収奪が記されているのです。ただし、ここに記される収奪犯は「日本人」ではなく、当時の実質的支配階級である「両班」なのでした。

《両班は世界中でもっとも強力にして傲慢な階級である。彼らが強奪に近い形で農民から田畑や家を買うときは、ほとんどの場合、支払いなしですませてしまう。しかも、この強盗行為を阻止できる守令（知事）は一人もいない。》（ダレ／金容権訳『朝鮮事情』平凡社東洋文庫）

つまり、（日帝に）「土地を奪われた恨」は実は、両班に向けられるべき「恨」を日本が肩代わりさせられているようなものといえます。西大門刑務所歴史館の中の「日帝時代の独立運動家に対する過酷な拷問」と紹介された蠟人形の展示物の多くの拷問は、日本にはない李氏朝鮮

独特の責め具によるものです。いわゆる従軍慰安婦にしても、彼らのいう強制連行その他に、戦後の軍事政権下における洋公主（ヤンコンジュ）米軍向け慰安婦の記憶が混線しているらしいことが、最近の在韓米軍用慰安婦関係の訴訟で明らかになってきています。

豊田有恒氏は『韓国へ、怒りと悲しみ』（ネスコ）の中で、高麗史の忠烈王紀チヨンヨルの以下の記録を紹介しています。

《良家の子女、年十四、五歳なる者を選び、巡軍らをして、人家を搜索せしめ、或いは夜、寢室に突入しあるいは奴婢を縛問びわもんし、子女なき者といえども、驚擾きょうじょうせられ、怨泣おんきやくの聲、閭巷あやうに遍あまねし》

高麗の宗主国だった元（モンゴル）には、選秀女せんしゅうじょという制度がありました。大汗（皇帝）の後宮に入れる美女を選抜する制度です。モンゴル軍は他民族を武力制圧すると、まずその部族の王の妻や娘を犯し、後宮に入れることも得意としていました。王妃が手籠めにされるのを見て、部族の将兵は一切の抵抗心を失うらしいのです。これこそが「寝取られ」の心理インパクトともいえます。また、黄文雄氏によれば、やはり忠烈王の時代、高麗政府は「寡婦処女推考別監」という役所を設け、上流階級の婦女子から処女を選抜し貢女コンニョとして送っていたといえます。この貢女のシステムは李朝にも継承され、明、清と宗主国を替えながら、美女の献上は続きました。

右の《》で引用した部分、簡単にいえば、（モンゴルの官憲が、14、15歳の美少女のいる家

をガサ入れし、あるいは夜、寝室になだれ込み、奴婢を締め上げて、娘をかっさらっていく。そのため恨みの泣き声なきこゑが巷まちにあふれた」ということです。

どこかで聞いたことがあるようなお話でしょう。そう、これをちよつとアレンジすれば、「従軍慰安婦の強制連行」話の一丁出来上がりです。

つまり、日本が韓国から突きつけられている「恨」の多くが、本来、李朝の王族や両班、戦後の軍市政権、あるいは元、明、清に向けられるべきものなのです。「諦」という概念のない朝鮮では「恨」は決して消滅することなく代が替わって受け継がれていきます。しかし、その「恨」の対象であるべき、元も清も明も李氏朝鮮も朴軍市政権も今は存在しません。相手はいわば倒産企業です。彼らの「恨」は不良債権になってしまったのです。通常なら、さすがにこれで諦めがつく、いや、つけなければならぬのですが、よくしたもので、債権の相続者であることを主張すれば（恐ろしいことに主張だけでOKなのです）、そのぶんの保証を考えようという奇特な国がすぐ隣に存在したのです。言うまでもなく、それは日本です。ために本来は無関係な請求書までもが日本に回ってきているというのが、実情といえます。

### 「恨」は民族の原動力

韓国にとって、「日帝36年」はオールマイティのジョーカーであり、打ち出の小槌であり、ドラえもんのポケットに他なりません。あらゆる葛藤や劣等感も「日帝36年」という語がそれを埋めてくれるのです。そしてその「恨」は溶けることなく永遠に続きます。つまりエンドレスで韓国人の脳内に、怒り、憎しみのアドレナリンが分泌されるというわけです。今では韓国人にとって日本に対する「恨」が、すべての原動力になっている感すらあります。韓国にとって日本と全面和解し、日本に対する「恨」を放棄することは、それ以降の民族の目標を失うことを意味するのです。あらゆる生産における原動力の喪失ですから、絶対に日本を赦ゆるすことなどありえません。

つまり、これらから導き出された結論は、いくら謝罪しても無駄だということです。むしろ、下手に謝罪してしまうと、頭の下げ方が足りないだの、腰の角度が高いだの、声に誠意がこもっていないと、難癖をつけられるだけといっているだけでしょ。そういう不毛なことはそろそろ終わりにしませんかというのが、この本の趣旨のひとつなのです。

## ○ストロング・ 코리아 とチキン・ 코리아 / 分裂する韓国イメージ

### 日韓比較広告としてスタートした韓流ブーム

NHKから民放各社、大手雑誌にスポーツ新聞、あらゆるメディアを総動員した翼賛・韓流ブーム。大韓民国の国策機関である国家ブランド委員会と「オリンピックから選挙までプロデュースする」といわれた日本の大手広告代理店の合作であったことは今では、いや、ブームの絶頂期ですら囁かれていたことでした。

韓流が、自然発生的なブームではなく、作られたブームであるということは、韓国モノを紹介するときのマスコミのあまりにも類型的な論調からも充分推測できました。曰く、「日本の単調なドラマに比べて韓国のドラマは情熱的でロマンチック」、曰く「JPOPアイドルは子供っぽいけど、KPOPの歌や踊りは洗練されていて完成度が高い」、曰く「キム・ヨナのプログラムプログラムの華麗さに比べると浅田真央のそれは幼くて見劣りする」。

これらに共通しているのは「日本の○○に比べて韓国の○○は」といった具合に、必ず日韓を比較して、最後に韓国に軍配を上げるという比較広告的ロジックです。おそらくこういった比較広告的な売り出し方は、ブランド委員会側が代理店に提示した契約事項のひとつだったの

でしょう。優劣、上下の関係にことさらこだわるのが韓国の文化だからです。むしろ、日本人にはない発想なので、逆にわざとらしさが際立った感もありました。

中でも傑作だったのは、ブームのさなか、さんざ聞かされた、「徴兵制のある韓国の男性は草食系の日本の男性より男らしくて遅い」というフレーズです。果たして韓国人のどこが男らしいのかという当然の疑問はさておいても、そういった「くらしさ」やマッチョイズムを日ごろから目の敵にしているアンチ・ジェンダーのフェミニズム女史や、軍隊と聞いただけで全身から尋麻疹じんましんが吹き出るお花畑9条信者の皆さんが、この手の発言に何のリアクションも示さなかったのが不思議でなりません。集団的自衛権に反対する市民団体はなぜ、この「右傾化を煽る危険な韓流ブーム」に抗議の声を上げなかったのでしょうか。

### 日帝と断絶した韓流

それはさておき、私が一連の韓流商法に唯一新鮮なものを感じたとすれば、そこには「日帝」の影が一切なかったことです。

韓流以前にも散発的に韓国の映画や歌謡曲が日本で紹介され、そこそこ注目を集めることはありましたが、多くは、日帝、植民地支配、差別といった負のイメージとどこかつながって

ました。いわば、日本人の贖罪意識に訴えかけることによってセールスが成立していたのです。日本でも大ヒットし、今もカラオケのスタンダード曲になっているチャ・ヨンピルの『釜山港に帰れ』にしても、「日本語版は別れ離れになった恋人を歌ったものだが、原曲は日本による強制連行がテーマだ」などというもつともらしい解説がついたものです。同じくチャ・ヨンピルの『恨五百年』、タイトルだけを聞けば秀吉の朝鮮出兵を連想する日本人も多いでしょう。実際、そういった説明をする評論もあつたと記憶します。正確には、先にも触れたとおり、高麗の將軍だった李成桂がクー・デターによつて朝鮮王朝を建てたとき、江原道に逃れた高麗王朝の殘党たちが李成桂に恨をもつて発した言葉が曲のタイトルの由来です。「臥薪嘗胆」という言葉が、呉王の夫差が越国に殺された父王の恨みを忘れないため、固い薪を枕に、苦い胆を舐めて復讐を誓つたという故事から来ているのに似ています。「恨〇〇年」は、おそらく韓国では成句になっているでしょう。

韓国の歴史認識によれば、日本は併合時代、朝鮮の人民から搾取するだけに飽き足らず、文化、言語まで奪い、日本名を強制したということになっています。その他、強制労働、慰安婦、性奴隷と「日帝の悪行」は留まることを知りません。

ならば、ヨンさま（ペ・ヨンジュン）も彼のおじいさん、ひいおじいさんの時代には、日本名を強制的に名乗らされていたということになるわけです（実際、朝鮮で日本名に改名したのは全世帯の75%。つまり25%の朝鮮人は朝鮮名で通したということになります）。少女時代の

メンバーの誰かは、親戚が日本軍の性奴隷にされている可能性も捨て切れません。なにせ慰安婦は20万人もいたのです（終戦時の朝鮮の人口は約2000万人）。さらにいうなら、チャ・グンソクの大叔父さんは憲兵隊に連れていかれ筑豊あたりの炭鉱作業員として死ぬまで働かされていたかもしれませんし、東方神起のメンバーの何人かは、日本の特高警察に拷問死させられた独立運動家が血筋にいるはずです。KARAのご先祖さまは悪逆な日帝に土地を奪われ、血の涙に足元を濡らしながら哀号、哀号と泣き暮らしたことでしょう。

しかし、そういった「事実」は韓流雑誌のどの特集を探しても載っていませんでした。韓流ファンの集まるサイトを覗いてもその手の話題で盛り上がっているのを見ることがありません。何よりもイメージとしても結びつかないのです。東方神起のおじいさんが「金田」（金本でも安田でもいいのですが）と名乗っていたというのは、ちょっと想像できませんが、これをチャ・ヨンピルや桂銀淑に置き換えると、あまり違和感がなくなります。

つまり、日帝と韓流は地続きではないのです。「日本女性がメロメロになるカッコイイ韓流スター」というフィクションと「日帝に搾取され、奴隷のように扱われた朝鮮人」というフィクションは相容れないということを、ブームをプロデュースした代理店もクライアントである韓国の国家ブランド委員会も、プレゼン段階で既に織り込み済みだったと思います。韓流スターは、ある日ひょいと生まれた韓流スターとして登場しなければいけませんでした。その意味では、韓流スターは父なし子といつてもいいのです。

## ストロング・ 코리아 とチキン・ 코리아

かくして、「日本女性がメロメロになるカッコイイ韓国人」と「日本人に搾取され、奴隷のように扱われた韓国人」という、およそイメージ的にかき離れる二つの韓国人像が並立することになりました。両者の間に連続性はなく、人格的にも分裂しています。

前者を好ましい韓国、優れた韓国、強い韓国、誇らしい韓国という意味でストロング・ 코리아 (S K)、後者を不幸な韓国、踏みにじられた韓国、惨めな韓国、恨みの韓国という意味でチキン・ 코리아 (C K) とこの本では仮称します。

ために、S Kと書かれた袋とC Kと書かれた袋をイメージしてみてください。

たとえば、「倭国に優れた先進文物を伝えた三韓時代」は、日本に対する韓国の優位性を示す事例としてS Kになります。「侵略され根こそぎ文化を奪われた併合時代」は当然C Kです。「同胞女性20万人を性奴隷にされながら黙認し、なおかつ言われるまま強制労働に甘んじていた」弱い韓国人像はC Kの袋へ、「日帝の圧制に対し、民族独立の気概と強固たる意志をもって徹底的に抵抗した」強い韓国人像はS Kの袋に、という具合に分別できます。「秀吉軍になすすべもなく蹂躪された朝鮮」はC Kで、その秀吉軍を蹴散らした「李舜臣將軍の水軍」はS Kの袋行きです。

むしろ、この分類法は、在日韓国朝鮮人に対しても応用できます。映画「パッチギ！」(05

年)に描かれたような、日本人不良高校生も震え上がるケンカ上等の朝鮮高校生(S K)と、拉致問題、ミサイル問題が取り出されるたびに、制服のチマチヨゴリが切り裂かれるなどの嫌がらせを受け恐怖にかられている朝鮮高校生(C K)といった具合です。

こうして振り分けパンパンに膨らんだ二つの袋を人格化すると、まったく異質のキャラクターがそこにいることがおわかりになります。

韓国は、S KとC Kをコインの裏表に、時に日本に対する無言の圧力の材料とし、時に国内のナショナリズムの高揚に巧みに利用してきた経緯があります。すわなち、S Kでは、本来あるべき日本に対する優位性を、C Kでは日本の残酷野蛮後進性の被害者という面を、内外に喧伝することによって、民族的自我の安定を図ってきたというのが私の正直な見方です。

アメリカ各地に韓国が建立をもちろむ慰安婦像や記念碑は、まさしくC Kの極みなのですが、これを恥辱の上塗りと考えないところが、実に彼ららしいところといえます。つまり、日本相手にはC Kもまた有力な武器になるということです。

先にも言いましたが、チヨ・ヨンピルにしろ桂銀淑ケイインソクにしろ、セールスするのは「恨」であり、その意味で彼らはC Kアーティストといえます。歌謡に限らず、映画でも演劇でも日韓の歴史が絡むものは必ずといっていいほど、C Kが基盤となっていました。日本人による創作物でも、韓国朝鮮人(の役)が登場するとまず100%の確率で、植民地支配、強制連行、差別、祖国分断といったC Kが描かれ、観客(読者)に贖罪感や同情が自然に刷り込まれるのです。

## 分裂と統合

2014年（平成26年）7月、韓国で一本の映画が封切られ、1カ月で1600万人の観客を動員するという記録的ヒットを打ち立てました。タイトルは「鳴梁」<sup>ミョソリヤン</sup>。李舜臣將軍率いる朝鮮水軍と秀吉軍の海戦を描いたスベクタクル巨編です。

李舜臣の活躍は韓国人の対日ナショナリズムを大いに刺激するテーマらしく、過去何度も映像化されています。その嚆矢<sup>こうし</sup>となったのが、1986年（昭和61年）のTV時代劇『壬辰倭乱』（イムジンウエラン）でした。壬辰倭乱とは秀吉の起こした文祿の役の韓国・朝鮮側の呼び方です。当時の韓国のTVドラマの数倍の制作費をかけ（韓国ではカラー放送が定着するの80年代になってからでした）、李舜臣將軍と秀吉軍の鳴梁海戦を最新の特撮技術によって完全再現するという話題作でした。

産経新聞元ソウル支局長の黒田勝弘氏によれば、このドラマのヒットの一大要因は、それまで韓国では一方的な被害者の立場でしか描かれなかった秀吉の侵略を、朝鮮サイドがみごとこれを撃退するというストーリーの痛快さにあったのだそうです。当時、韓国は2年後にソウル五輪を控え、経済発展の波に乗らんかの時期でした。その自信が、民族の受難劇をCKからSKのカタルシス・ドラマへと一気に変容させたのかもしれませんが。もともと、最大の見せ場である特撮シーンを担当したのは、戦隊シリーズなどでおなじみの東映特撮の重鎮<sup>じゅうしん</sup>・矢島信男

監督とそのスタッフ、つまり日本人だったという事実を同ドラマに熱狂した韓国人の何人が知っていたかは疑問ですが。

2003年（平成15年）、ドラマ『冬のソナタ』に始まる韓流ブームの構築は、『壬辰倭乱』から20年を待たず、韓国がようやく日本にSKをセールスできる磁場を確保したことを意味します。しかし、ブームがSKを強調すればするほど、「逞しい韓国人」をアピールすればするほど、彼ら韓国人が本来日本対して水戸黄門の印籠のごとく掲げてきたCKというオールマイティのカードが今後は行使できなくなってくるというジレンマに陥<sup>おちい</sup>ることになります。「日本女性がメロメロになるカツコイイ韓流スター」と「日帝に搾取され、奴隷のように扱われた朝鮮人」があまりにもイメージ的に遊離してしまっただからです。

戦後、韓国が、歴史を創造する（韓国流にいうと「歴史を立て直す」）ことにおいて、自らがストロング・ 코리아 とチキン・ 코리아 という二つの「自画像」に分裂したまま、それを統合させようとしなかったための悲喜劇がここにあります。

SKもCKも、「日本」という鏡を通して見た韓国の自画像に過ぎません。鏡はひとつですが、映る顔は二つあるのです。ついでに言えば、ここでいう「日本」とは、あくまで韓国にとっての日本、括弧つきの日本に他なりません。

## ●キラ―被害者・韓国

### 千年恨発言の意味

「加害者と被害者の立場は千年の歴史が流れても変わらない」

朴権恵大統領が2013年(平成25年)の三一節の記念式典で行った演説での言葉です。この発言、言い換えるなら、韓国は日本を半永久的に赦すことがないと言っているとも取れます。韓国人は、被害者と加害者という関係に強い執着がありますが、それを額面どおりの言葉と受け取るのもナイーブに過ぎるというものです。彼らのいう、被害者と加害者という語には、儒教的な上下関係の巧みなワーディング(言い回し)があると、思っているように語には、加害者・日本は被害者である韓国にとつて道徳的下位にあるというのが彼らの暗黙の主張なのです。ついでにいえば、被害者は絶対的な善であり加害者は絶対的な悪ということになります。

朴大統領の千年発言は、まさにこの関係を永遠に固定化するという宣言に他なりません。

もはや、この先日本がどのように謝罪しようと、賠償金(?)を払おうと、関係の再構築は不可能だということを大韓民国大統領自ら裏書したことになるわけですから、むしろ、この発言を受けて日本は気が楽になったことでしょう。ならば、必要以上の贖罪感など捨ておけ、そ

う思った日本人が大勢であったと思います。

面白いのは、通常、「被害者」といえば弱者のイメージなのですが、韓国でいう「被害者」は強者であり、「加害者」に対しては絶対の正義をもち、ある種の特権を有すべき存在であるということ。いい例が、貨客船セウォル号沈没事故(2014年4月)で亡くなった修学旅行生の遺族とその支援者たちです。彼らは確かに「被害者」であり、何の落ち度もなくわが子を失ったという点に関して同情を禁じえませんが、救出され一命を取り留めた生徒の親に「なぜお宅の子だけ助かった」と食ってかかってみたり、「特別法」(被害生徒である2年生はおろか3年生たちにも大学特例入学の機会を与えるなど仰天な内容も含まれています)制定を求めて断食闘争を行ったり、無関係の第三国(米英)に新聞広告やデモでアピールしたり、といった、およそ日本人の感覚からすれば常軌を逸した行動の数々に、唾然となった人も多いでしょう。

とりわけ、日本に対して「被害者」であることは、圧倒的優位、強者の立場にあるということの意味します。ここでもC K(チキン・コリア)とS K(ストロング・コリア)が微妙に倒錯しているのです。つまり、被害者という弱者(C K)を強調することで、暗にドスを利かし(S K)、要求を正当化させるという彼らなりの戦略と見ていいと思います。

韓国人が好んで使う「被害者」という看板は、「人間発電所」や「地獄の料理人」といったプロレスラーのニックネームのようなものと思った方がわかりやすいでしょう。グレート被害

者、キラー被害者、アブドラー・ザ被害者です。

### 『火垂るの墓』が極右思想映画？

高畑勲監督のジブリ・アニメ『火垂るの墓』（88年）（原作・野坂昭如）といえば、大戦末期の神戸を舞台に、親を亡くした兄と幼い妹が懸命に生きる姿を通して、戦争の悲惨さと人の世の無情を描いた感動作として知られ、日本はいうに及ばず世界中のアニメファンの涙を絞り大ヒットを記録しました。なんと、イギリスで実写版リメイクも決定しているそうです。国籍、宗教、思想の左右を超えて愛された『火垂るの墓』ですが、自由主義諸国で唯一、一般公開にこぎつけるまで26年もかかった国があります。他ならぬ韓国です。

《極右主義論議で国内封切りに難航してきた日本アニメーション『火垂るの墓』が来る6月19日、国内で正式に封切りする。（中略）『火垂るの墓』は、第2次世界大戦当時、爆撃で両親と家を失った14歳の兄清太と4歳の妹節子の生存のための壮絶な死闘を描いた作品だ。戦争がもたらす残酷さと大人の集団利己主義の間で踏みじられざるを得なかった幼い兄と妹の話を描いたが、戦争の挑発国である日本の自国民を被害者として描写していて、極右主義作品という論議を起こしてきた。国内観客から「加害者である日本を被害者として描いた」という指摘

に高畑勲監督は国内のある報道機関とのインタビューを通じて「客観的に描いただけで、日本を決して正当化させようとしたのではない。原因から見直さなければ戦争に反対することはできない」として反戦映画であることを強調した。》（『ジョイニュース24』2014年5月15日付）

どのような環境で鑑賞したかは知りませんが、『火垂るの墓』に極右主義映画という評価を下せるのは世界中探しても韓国人ぐらいのものと思言していいと思います。

カトリック・ドヌーヴ主演のミュージカル映画『シエルプールの雨傘』（64年）は、戦争に引き裂かれる恋人たちを描いた切ないラブストーリーですが、この作品で語られる戦争はアルジェリア独立戦争でした。韓国人の立場からすれば、当然、植民地アルジェリア正義、フランス悪ということにならなくては理屈が合いません。つまり、『シエルプールの雨傘』は「加害者フランスを被害者に描いた」極右主義映画ということになるわけです。

李氏朝鮮は過酷な階級社会でありましたが、韓国人のいう、被害者、加害者を階級に喩えるとよくわかります。被害者階級と加害者階級です。道徳的下位にある加害者階級が上位の被害者階級のフリをする、あるいは同じ権利をよこせよといっている、なんと不埒なことか、と彼らは憤っているのに過ぎません。

いわゆる「お花畑」と呼ばれる空想的平和主義者の中には、韓国に思い入れのある人も多いようですが、彼らの掲げる理念や理想主義と韓国の主張は基本的な部分で相容れないものであ

ることをいい加減に気づくべきです。中学時代、ある年長のお花畑さんにこう言われたことがあります。

「戦争に、勝者も敗者も、加害者も被害者もない。すべての人が不幸になるのが戦争だ。」なるほど、これはこれで論としては通っています。ところが、韓国の言い分はこれをまったく否定するものです。韓国からすれば、世の中には、加害者と被害者の二者しか存在せず、「被害者も加害者も同じ」という論理は、階級を否定する危険な革命思想に他なりません。邪悪な日本人だからこそ思い浮かぶ破廉恥極まりない発想ということになります。

### 「被害者になれる」という発想

在日文化人の辛淑玉<sup>シンスゴ</sup>氏の次の発言も、韓国人の「加害者×被害者」観を知るよい手引きといえます。

《多くの日本人が北朝鮮による拉致事件に政治的に飛びついたのは、長年、国家と一体となつた加害者として糾弾されてきたことに疲れたからだとは私は見えています。初めて堂々と「被害者になれる」チャンスがめぐってきたのがあの拉致事件でした。そして被害者に感情移入することで心のバランスを保っているように見えました。》（東京新聞2009年9月20日付）

「政治的に飛びついた」とは、何を意味するのでしょうか。拉致問題を政治的に利用するのであれば、政府としてはもっと早くから利用していたのではないのでしょうか。そもそも「被害者になれる」という発想自体、私には実に新鮮、ユニークと言わざるをえないのです。

拉致問題の解決どころか、その周知さえ遅らせてきたのが、国内外の韓国朝鮮勢力の被害者絶対論だったのです。拉致問題がまだ拉致疑惑といわれていた時代、家族会や救う会による地道な活動を、「差別だ」「右翼の捏造だ」と騒ぎ立て妨害し、これを報道しようとしていたマスメディアを萎縮させてきたのは、総連や民団の自称・強制連行で日本にやって来た、キラー被害者やアブドーラ・ザ被害者、あるいは旧社会党などの同調者でした。

辛氏の言葉は以下に続きます。

《もしこれが、拉致も強制連行もともに解決しようとするスタンスであったなら、歴史は大きく動いたことでしょう。》

ここでいう強制連行とは、いわゆる慰安婦問題のことです。ご承知の通り、日本軍の慰安婦強制連行を証明するものは一切見つかっていません。あるのは元慰安婦の証言だけですが、証言には裏づけが必要です。裏づけのない証言は証拠とはいえません。証拠がない以上、現時点で、それは事実ではなかったというしかないのです。

一方で、拉致問題においては「加害者」である北朝鮮が「被害者」である日本に「拉致被害者の調査をしてやるからカネよこせ」とゆすりたかりのヤクザ行為を働いているというのが現

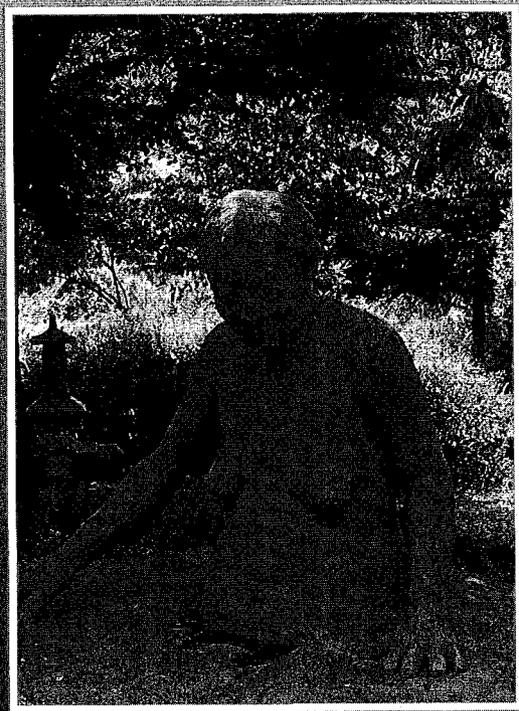
状です。営利誘拐と何ら変わることはありません。

### 北朝鮮工作員を動かした「母の慈愛」

元北朝鮮の工作員で韓国への亡命者だった安明進氏アンミンジンという人物を読者は覚えていらつしやるかと思えます。覚醒剤所持で逮捕という不祥事を起こして以来、日本のメディアとも疎遠となっていました。彼が北朝鮮の日本人拉致に関する多くの証言をもたらしてくれたのもまぎれない事実です。1997年（平成9年）3月、安氏は家族会の横田滋・早紀江さん夫妻と最初の面会を果たしますが、実はこのとき安氏は最後まで対面には及び腰だったそうです。朝鮮の工作機関の人間であり、いわば拉致問題の「加害者」にあたる自分がどの面を下げて「被害者」家族に会えばいいのかと彼なりに悩んだといいます。対面の席で、早紀江さんから「あなたも家族を北に残したままでお辛いでしょう」と声をかけられた安氏はその場で号泣したそうです。そして拉致事件の解決のために、あらゆる協力を惜しまないと誓ったのです。

横田夫人のこの言葉に、被害者が上、加害者が下だの、まして「被害者になれる」などという下衆げすな感情は一片もありません。人の母としての慈愛があるだけです。そして、拉致問題の解決を願うすべての国民の心根もまたそうであると信じています。

## 第3章 愛と呪いの国



ナヌムの家の「大地の女」像。奇怪な名譽のブロンズ像だ。根々の文化に具象表現は相性がよい。